
遠距離女としつこい男

シュウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遠距離女としつこい男

【Nコード】

N7054Y

【作者名】

シユウ

【あらすじ】

遠距離恋愛中の女子高生につきまとうしつこい男子高生の恋愛物語。女の子目線で話が進んでいきます。ちよつと変わったタイプ(?)の現代恋愛物語です。毎日更新していく予定でお届けします。

あなたが好きです

「好きです！愛してます！俺と付き合ってください！！」

「断る」

「なんで!？」

「・・・何回フラれたら気が済むの？」

「君がOKを出してくれるまでさ!」

はぁ・・・ウザイ。

何回告白を断ってもすぐに立ち直って告白してくる。

こいつアルツハイマーかなんかなの？

「何回告白しても一緒よ。私には付き合ってる人が居るんだから諦めてちょうだい」

「しかしそいつとはもう半年以上も会ってないんだろ？だったら俺にもまだチャンスはあるっ!」

いやいや、堂々と「俺と浮気してください」宣言されても困るし。

私には心に決めた人がいるのだ。

今は遠距離恋愛だから会えないだけで、心の底から愛していると言える。

多分向こうもそう思っているはずだ。

「もうチャンスなんて無いから。何回告白しても結果は同じだから。私の考えは変わらないから。私用事あるから。バイバイ」

しっかりと言い切って後ろを振り向く。

背後で何か言っているが、気にしないで歩く。

こいつが私につきまとい始めたのは、三週間前のテストのあとの学校帰りだ。

友達と別れて一人で歩いていた時。

「キミが吉野君子「よしののけいこ」さん？」

「え？はい。そうですけど・・・どちら様ですか？」

「俺の名前は長谷川隆夫「はせがわたかお」。良かったら俺と付き合ってくれないか？」
「・・・は？」

これが最初の告白だった。

私には遠距離恋愛している彼氏がいたので、申し訳ないと思いつつも丁重にお断りした。

しかしこれから毎日毎日学校帰りで一人になったところを告白され続けた。

最初の1週間は告白されたのも初めてだったので、断るのにも少し罪悪感を感じていたけど、こうも毎日告白されては断るのを続けていると罪悪感も何も感じなくなってきた。

毎回同じ場所で告白されるもんだから、2週間目は違う道を通ってみただけやっぱりダメだった。

まるでストーカーのように私がいる道だけを選んで待ち伏せしている。

これはもう訴えたら勝てるレベル。

もしかしたらからだのどこかに発信機でも取り付けられているのかもしれない。

そして現在の3週間目。

もう違う道を通るのを諦めていつもの道を通り、相手の精神をブツ壊すために全力で断り続けている。

しかしあいつの精神力は底なしか？

何度断っても断っても学習していないかのようにつきまってくる。

もしかして機械で出来ていて、学習するAIを搭載し忘れたのだからか？

それなら納得がいくが、そんな近未来の話がある訳がない。私はリアリストだからそんな話は信じたくもない。

「あ。忘れてた。メールしないと」

メールの相手はもちろん遠距離恋愛中の加藤正樹^{かとうまほろ}。

同い年の17才で事情があつて大阪へ転校してしまったのだ。

当時付き合つていた私と正樹は互いに別れるつもりはなくて、大人になつたら会う約束をして遠距離恋愛を続けている。

メールや時々する電話だけが私たちをつないでいるけれど、私達の気持ちはいつも目に見えない何かでつながっていると信じている。

きっと正樹も同じことを思っているはずだ。

そう思いながら私は正樹へメールを送った。

あなたが好きです（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。

前の作品から読んでいただいている方は、いつもありがとうございます。

この作品から読んでいただいている方は、よろしくお願い致します。

なんやかんやでまた恋愛小説に落ち着きましたが、これからも拙い文章ですがよろしくお願い致します。

では次回もお楽しみに！

私と正樹

私、吉野君子と加藤正樹が出会ったのは高1の2月。

あまり友好の輪を広げない私の、唯一と言ってもいいこの学校での友達の照井明子ていあきこが風邪で休んだ日のことだった。

明子以外に話す相手があまりいない私は授業と授業の間の休み時間中は、窓側の真ん中の席でボケーっと外を眺めていた。

朝、明子にメールを試してみただけで寝ているのか、未だに返信はない。病気は寝て治すのが一番だと思うから返信がないのは仕方がない。

今は昼休み。例によって、今も外を見ている。

「今日も雪がすごいや」

教室の中は暖房がついていても暖かいが、窓の外から見える風景は白一色だった。

今日はテレビの天気予報通りの猛吹雪である。

いつもなら上から下に降ってくる雪も、風のせいで右から左へと流れている。

この調子だと帰りの電車は全く動いていないかもしれない。

いや、北海道のJRはこんなことじゃ遅れないか。

そんなことを考えながら窓の外を流れていく雪を見ていた。

「あれ。キツネじゃない？」

ふと横から声をかけられた。

声が出た方向を横目で確認してみると、窓の柵に手をつけて外を見ている男子がいた。

「ほら。どっか行っちゃっ」

そう言われて私は慌てて視線を外に向けた。
吹雪のため視界は激悪だが目を凝らして探す。

「どこ？」

「あの木の近く」

言われた木の近くを見してみると、確かに黄土色をしたキツネがいた。
初めて見たわけじゃなくて中学校の時も時々見たことがあったけど、
やはり見れると少し嬉しい。

私自身はこの学校に入って初めて見た。

「俺今年初めて見た」

「私も」

「おい正樹！次移動教室だぞ！」

「うわっ！ちよっと待ってくれよ！ってわけで移動教室だから。吉
野さん。遅れたらダメだよ」

そう言っただけで友達のとこへ戻っていく男子。

どうやらボケーっとしていた私に移動教室のことを伝えに来てくれ
たらしい。

すっかり忘れていたけど次は理科室で実験をするんだった。

いつもなら明子が教えてくれるんだけど今日は居ない。

彼が来てくれなければ、私は授業開始のチャイムが鳴ってから慌て
て移動することになっただろう。

ありがたき幸せ。

それにしても全然話したこともないただの同じクラスの女子に話し
かけてくるなんて珍しい人だ。

理科室に向かいながらさっきの男子生徒について考える。

同じクラスなんだろうけど名前が・・・たしか『正樹』って呼ばれ

てたような気がする。
私は名前を覚えるのが苦手だった。

「あの、さっきはありがとう」

今日最後の授業の前の休み時間。
私は彼にさっきのお礼を言った。
私の席は窓側の真ん中ぐらいの席で、彼の席は廊下側の一番後ろの席だった。

「わざわざお礼？別にいいのに」

笑いながら、どういたしまして、と言う彼。

「だって……えーと……」

「ん？」

彼が不思議そうな顔をする。

「ごめん。名前聞いてもいい？」

「え……加藤です」

そりゃ驚くわな。

ほぼ一年間一緒に過ごしてきたクラスメイトの名前もわからないなんてどうかしていると自分でも思った。

「もしかして名前覚えてなかったの？」

「ごめん。私あんまり話さないから」

「いや、いいんだけどさ。でもなんかちょっとシヨック・・・」

あからさまに肩を落とす加藤君。
なんか・・・ほんとに申し訳ない。

「あ。冗談冗談！吉野さんは気にしないで！」

「なんで私の名前？」

「これが普通だと思っただけだなあ」

「私の普通とは・・・私がズレてるのね」

「かもね」

加藤君はそう言って笑った。

「これからもたまたまに話しかけてもいい？」

「加藤君がいいなら私はかまわないけど」

「ほんと！？良かったー。なんか吉野さんってちょっと近寄りがい感じだったから断られたらどうしようかと思った」

「そんなに近寄りがたい？」

ちょっとシヨックだった。

普通に過ごしてるだけなのに。

いや、私の普通はズレてるんだっけ。

「ちょっとね。照井さん以外と話してるのは見たことなかったし、

それ以外は頼杖ついて外見てるだけだったし」

「だって明子しか友達いないもの」

「そうなんだ・・・じゃあ僕と友達になってよ」

「そこは契や・・・いや、なんでもない。別にいいけど、友達になっ
つてどうするの？」

明子とは共通の話題があるからまだわかるけど、彼は特になにも接点がない。

「仲良くなるうよ。せっかく同じクラスなんだし」

「まあそれもいいかもね。よろしく、加藤君」

「こちらこそよろしく、吉野さん」

これが私と正樹のファーストコンタクトだった。

私と正樹（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると執筆意欲が高まります。

初めは結構のんびり進めていきます。

気長にお付き合いくださいませ。

次回もお楽しみに！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7054y/>

遠距離女としつこい男

2011年11月21日20時50分発行